

熟して落ちたドリアンの実

映画『トンビルオ』のサバでの受容とマレーシアの政権交代

山本 博之

本稿で取り上げるのは、ボルネオ島のサバ州に住む先住諸族の民間伝承を題材としたマレーシアのアクション映画『トンビルオ』(Tombiruo: Penunggu Rimba)である。ただし映画の話の前に、2018年5月8日の総選挙でマレーシアが1957年の建国以来はじめての政権交代を迎えたことに関するエピソードを紹介したい。

実を結ぶドリアンと 崩壊する青色の水タンク

投票日の朝、サバ州で発行されている地方新聞に少し変わった記事が掲載された。選挙があると選挙運動などに関する商売の機会が増えるので景気が上向きになればという街の声を紹介した記事で、「Durian Runtuh」の見出しが付けられた[Vanessa Jsol 2018]。「durian runtuh」は、マレー語で「ドリアンの実が落ちる」あるいは「落ちてきたドリアンの実」を意味する。果物の王様と称されるドリアンは、熟して食べごろになると実が木から落ちてくるので、ドリアンの収穫は木に登って実を採ろうとはならず、実が落ちてくるのをじっと待つしかない。「ドリアンの実が落ちるのを待つ」は「果報は寝て待て」に似た意味のマレー語の表現で、「棚からぼた餅」のような意味でも使われる。5年に1度の選挙で棚ぼた式の商売の機会を期待するという意味でつけられたタイトルだろう。

「ドリアンの実が落ちるのを待つ」は、私がサバの田舎町をまわっていてしばしば聞いた言葉である。世間話のついでに選挙の話になり、今の政府はあまり評判がよくないけれど次の選挙ではどこが勝つだろうかという話になると、しばしば「ドリアンの実が落ちるのを待つ」という答えが返ってきた。やがて機会が来たら果実が自分たちのものになるから今はじっと我慢しているということで、間接的に今の政

府を支持していないという意味になる。ただし、誰にどう伝わるかわからない状況で意中の政党の名前を口に出すことは憚られるため、「ドリアンの実が落ちるのを待つ」と言うのだった。1990年に最初にサバを訪れて以来、選挙が近づくたびに私はこのやり取りを経験した。サバの人びとの間で「ドリアンの実が落ちるのを待つ」と言えば、今の政権はもう十分だという意味になるという共通の認識があった。選挙の当日、一見すると何でもないような記事を書いて、それに「ドリアンの実が落ちる」と見出しをつけたのは、そろそろ政権交代の機が熟したのではないかというメッセージで、わかる人にだけ伝えればよいという呼びかけだった。

選挙で政権交代が実現した1週間後、今度は「ムサン・キングが実を結んだ」という記事が掲載された[Mu 2018]。ムサン・キングはドリアンの有名な品種なので、この記事は「ドリアンが実を結んだ」という意味になる。「ドリアンの実が落ちる」のを待っていたサバの人たちが「ドリアンが実を結んだ」と喜んだのである。記事の内容は、サバのドリアン農園の努力によって品質の良いドリアンが採れるようになり、半島部や外国に輸出できるほどになったというものだった。これに重ねて、政権交代という「ドリアンの実」をサバが半島部に輸出したという意味にもなる。半島部では独立以来はじめての政権交代を経験して誰もが浮足立っているように見えるけれど、州レベルで見れば、独立以来ほぼ9年ごとに州政府の政権交代を経験してきたサバ州にとって、政権交代は珍しいことではない。長く与党の票田と言われてきたサバ州で野党が躍進したことが2018年の政権交代の背景にあった。この記事には、中央政府を倒したという喜びとともに、サバから半島部に政権交代を受け入れる心性を届けたのだという自負もうかがうことができる。

さらに選挙から1か月後には、コタキナバル市内

で建物の上に備え付けてあった青色の水タンクが重さを支えきれなくなり、停めてあった車の上に落ちて車が大破したという記事が掲載された[Gomes 2018; Najurus 2018; Joibi 2018]。5月の総選挙で敗れた前政権は票獲得のためにバラまき政策をとっており、なかでも青色の水タンクの供与で知られていた。2013年の総選挙のときから「青い水タンク」は前政権の代名詞になっていた。「青い水タンクが落ちた」と聞けば、サバの人びとは前政権が倒れたという意味に受け取る。青い水タンクの写真入りの記事によって、サバの人びとは「ドリアンの実」が落ちたことを改めて共有したのである。

ひとたび発せられた情報は、その表面上の意味のほかに、社会文化的な状況を共有する人びとの間だけで理解される別の意味を持つことがある。それは報道記事だけでなく、文学や映画でも同じである。情報の発信者がそれを意図していることもあれば、意図せずに情報が伝わることもある。本稿が紹介する映画『トンビルオ』はその好例である。

ボルネオの「陸の民」と「海の民」、そして「サバ人」としてのまとめ

『トンビルオ』は、サバの内陸部の密林を舞台にした小説を半島部の制作会社が映像化した映画である。サバの人びとと半島部の人びととでこの映画から受け取るメッセージが異なることを理解するため、マレーシアにおけるサバの立ち位置、そしてサバ内の内陸部と沿岸部の関係について整理しておこう。

マレーシアは、地理的に半島部マレーシアとボルネオ島(サバとサラワク)から成る。どちらもイギリスの植民地だったが、半島部が1957年に独立してマラヤ連邦となり、6年後の1963年にサバとサラワクが加わることでマレーシアが結成された。サバとサラワクにとっては対等な合併のつもりだったが、すでに独立していたマラヤ連邦の仕組みをもとにマレーシアが形成されたため、マレーシアでは政治・経済・文化のいずれも半島部に集中することになった。サバとサラワクが内政の自治権を持ったこともあり、半島部に住む人びとや中央政府にとって、サバとサラワクは「海の向こう」にある別の国のようなもので、そこに暮らす人びとのことを日常的に意識する機会は皆無

だったと言っても決して言い過ぎではない。

サバの内部に目を向けると、マレー人、華人、インド人から成る半島部とは住民の民族構成が大きく異なる。サバの人びとは言語で分類すると数十に分けられるとも言われるが、大きく分けると「海の民」と「陸の民」(そして華人)に分けることができる。

「海の民」とは、バジャウ人、スルック人、スンガイ人、ブルネイ人など、伝統的に沿岸部(および大きな川沿い)の水上集落で暮らす人びとで、イスラム教徒である。サバではマレー語が共通語なので、日常的に自分たちの民族の言葉とマレー語を話す。半島部の常識では、イスラム教徒で日常的にマレー語を話す人はすべてマレー人であるが、サバの「海の民」には自分たちをマレー人だと思わない人も多い(ただし、1990年代以降にはサバの「海の民」で自分をマレー人だと考える人も増えている)。

「陸の民」は、沿岸部から内陸部にかけて住んでいる人びとで、沿岸部にはキリスト教を受け入れた人びともいるが、内陸部に住む多くの人びとは精霊信仰を守っている。「陸の民」の間には、「海の民」はフィリピンやブルネイなどの近隣諸国に民族的起源がある外来移民の子孫であるとの考え方があり、それと区別して「陸の民」を先住諸族と呼ぶこともある。

「陸の民」は多くの民族から成るが、1950年代以来、「陸の民」を1つの民族にまとめようとする動きが繰り返されてきた。はじめ「陸の民」はまとめてドゥスン人と呼ばれ、後にカダザン人と呼ばれた。その後、カダザン人は沿岸部、ドゥスン人は内陸部に住む別々のグループではないかという議論を経て、今では「陸の民」の公式の民族名はカダザンドゥスン人とされている。

サバには言語や宗教が異なる人々がたくさんおり、民族ごとに争うこともあったが、全体として見るとライバル関係にありながら協力し合うことでより大きなまとまりに対抗しようとしてきた。沿岸部と内陸部の「陸の民」がまとまったのは「海の民」とのライバル関係を意識したためであり、さらにマレーシア結成によって半島部の人びととのライバル関係が意識されると「海の民」と「陸の民」が手を結ぶことでサバ人としてまとまった。

映画版『トンビルオ』と小説版『トンビルオ』 ——非カダザンドゥスン人の手による人気作品

映画のタイトルになっているトンビルオは、内陸部のカダザンドゥスン人の民間信仰において伝承され、精霊とも言われる伝説上の生き物で、森で人間にいたずらをしたりする存在である。『トンビルオ』は、民間伝承のトンビルオをもとに人間の姿をしたスーパーヒーローを造形して、森林の守護者という性格を与えた小説がもとになった映画である。監督は『マトリックス』シリーズのVFXコーディネーターなどで知られるオーストラリア人のセス・ラーニー (Seth Larney) で、これが長編の初監督作品となった。

『トンビルオ』はサバを舞台にしたことで半島部の人びとにとって異国情緒に満ちたアクション映画となり、マレーシアでこれまでなかったジャンルの映画として高い人気を博した。2017年10月12日にマレーシアで劇場公開されると、全国の62スクリーンで最長42日間にわたって上映された。劇場公開されるマレーシア映画の約半数が2週間で公開が打ち切れ、残りの半数が3週間で公開が終わる中で、6週間にわたって上映が続いたのは人気の高さを物語っている。2017年に劇場公開された59本のマレーシア映画の興行収入の総額の14%にあたる797万リングを得て、この年のマレーシア映画の興行収入第2位となった。

なお、日本では2019年3月に「未体験ゾーンの映画たち2019」で劇場公開され、DVDも販売されている。邦題は『トンビルオ! 密林霸王伝説』だが、本稿では『トンビルオ』と書く。

原作となる小説版『トンビルオ』[Ramlee 1998] は1998年に刊行された。著者のラムリー・アワン・ムルシド (Ramlee Awang Murshid) は1967年にサバ州パパールで生まれたイスラム教徒である。高校までサバで学び、テレビ局のレポーターなどの仕事を経た後、半島部のマレーシア国民大学でコミュニケーション学を学んだ。

『トンビルオ』はラムリーが大学入学の前年に書いた2作目の小説で、それ以来、ラムリーは現在に至るまで毎年1冊以上のペースで小説を発表している。すでに30冊以上あるラムリーの小説のうちトンビルオ三部作として、『トンビルオ』、『森林の精神』[Ramlee

2001]、『最後のトンビルオ』[Ramlee 2004]がある。さらに三部作の完結から13年後には『トンビルオの形見』[Ramlee 2017]が刊行された。後述するようにトンビルオの正体はエジムという名前を持つ非イスラム教徒の男だが、『最後のトンビルオ』以降の作品ではイスラム教徒になってイスラム名のアマルッディン・アブドゥッラーを名乗り、妻のシティ・ヌルハリズとの間に娘をもうけている¹⁾。

ラムリーは、サバを舞台にした作品でマレーシア全国でベストセラー作家として知られるまでになった売れっ子の作家である。読者は半島部とサバのどちらにもいるが、半島部とサバの人口比から考えて半島部の方が読者数が多い。サバは半島部の人びとにとって外国のようなものだが、サバのイスラム教徒の暮らしは半島部のマレー人の暮らしと大きく異なるものではないため、半島部のマレー人向けに異国情緒を表現しようとするればカダザンドゥスン人を登場させることになる。ラムリーはサバの西海岸出身のイスラム教徒で、内陸部のカダザンドゥスン人の暮らしを自分の暮らしとして経験したことはおそらくなかっただろうが、交友関係などを通じてカダザンドゥスン人の暮らしを知る機会があっただろう。また、ラムリーは高校卒業後にテレビ局のレポーターとして取材でサバ各地をまわった経験があることから、そのときに見聞きしたことも小説執筆の参考となったものと思われる。

このように、トンビルオの物語は、サバ出身だが自身はカダザンドゥスン人ではない沿岸部出身のイスラム教徒であるラムリーが、交友関係などを通じて実体験したことや自身のリサーチを通じて得た情報をもとに内陸部のカダザンドゥスン人を主役とする小説を執筆し、それをもとに半島部の映画制作会社がオーストラリア人の監督を招いて制作した映画である。

映画『トンビルオ』の内容紹介 ——登場人物とあらすじ

『トンビルオ』のあらすじを紹介しよう。物語の核心部分まで書いているので未見の方はご注意ください。

1) トンビルオの妻の名前が半島部出身のマレーシアの「歌姫」シティ・ヌルハリザと1文字違いであることは興味深いですが、その意味は別の機会に検討したい。

●密林の守護者トンビルオ(エジム)の誕生

舞台はボルネオ島のサバ州で、奥深い森林が広がる内陸部のケニンガウ。ボボリアン(字幕では呪医)のモンシロイが人里離れた小屋に独りで住んでいる。モンシロイはレイプ被害に遭って妊娠した若い娘トブギを小屋に匿う。トブギはモンシロイに助けられて出産するが、出産によって命を落とす。レイプ犯が犯罪の証拠を消すためにトブギと赤ちゃんを殺そうとしてモンシロイの小屋に来る。レイプ犯は赤ちゃんを殺そうとするが、赤ちゃんはとても醜い顔をしており、驚いて動きが止まったレイプ犯をモンシロイが刺し殺す。モンシロイは赤ちゃんが密林の守護者トンビルオの力を備えていると気づき、赤ちゃんを小舟で川に流して森に返す。

森の不思議な力に守られた赤ちゃんは、森の中で元軍人のポンドロウに拾われる。ポンドロウは木の上に作った小屋に1人で暮らしている。ポンドロウは赤ちゃんにエジムと名付け、父としてエジムを育てる。エジムは醜い顔を見た人たちから苛められるが、森の不思議な力によって守られる。ポンドロウはエジムの顔は神の姿なので人に見せないようにと言い、木で作ったマスクをエジムに被せる。自分を苛める人たちへの怒りを抑えきれずに自分は悪魔の子なのかと悩むエジムに、ポンドロウは愛によって力をコントロールすることを教える。ポンドロウはエジムに剣を見せ、ときが来たらエジムにこの剣を託すけれど、破壊のためでなく守るために使うようにと言付ける。

●ダム建設に関わる陰謀とブルハムとサリナの死

20年後。エジムは成長し、人びとから森林の守護者トンビルオと呼ばれるようになっていた。ブルハム・オマール²⁾と娘のサリナを乗せた車が記者会見場に向かっている。ブルハムが社長をつとめる木材会社のアナックブミはダム建設事業に参入するという噂があり、ブルハムはダム建設事業への参入を記者会見で発表すると見られている。ブルハムは、今回の決断は難しいものだったため、サリナの姉のバイズーラにも記者会見に立ち会ってほしかったと言う。車がスピー

ドを落とすと、ダム建設に反対する住民や記者に囲まれる。記者会見場に着くと、ブルハムの妻とブルハムの弟のジュスランに迎えられる。ジュスランはアナックブミの重役で、記者会見の準備を整えていた。同じ頃、サリナの夫で自然保護部隊のアミルッディン(字幕ではアミール)も車で記者会見場に向かっていたが、村が何者かに襲撃されているとの連絡を受けて村に向かう。

記者会見で、ブルハムはダム建設によって多くの人びとが立ち退きしなければならないことに反対であるとして、ダム建設事業からの撤退を発表する。シナル・テレビの記者ワン・スラヤは、経営危機にあるアナックブミにはダム建設事業からの撤退は難しいのではないかと疑う。村が襲撃を受けているという連絡が入り、ブルハムがサリナとジュスランと一緒に現場に向かい、ワン・スラヤたちもその後を追う。

村では謎の男たちによって家々が焼かれ、村人たちが銃で撃たれていた。エジムとポンドロウが現れて襲撃から村人を救おうとするが、ポンドロウは胸に銃弾を受けてしまう。父の死に怒ったエジムは男たちを追う。男たちが乗った車がブルハムたちを乗せた車と衝突しそうになり、ブルハムたちは車ごと崖から落ちる。アミルッディンが駆け付けると、ブルハムはすでに事切れており、瀕死のサリナはアミルッディンに抱えられて息を引き取る。マスクの男(エジム)が現場から逃げたことから、アミルッディンはマスクの男を捕らえて義父と妻を殺された恨みを晴らすと誓う。

ブルハムたちの家では、ブルハムの妻が、常に人びとのことを第一に考えていたブルハムの遺志を継いで、家を焼かれた村人たちの支援のために募金パーティーを開くことにする。ダム建設事業を進めたいジュスランは、会社の株を相続したバイズーラに株を全部売ってほしいと持ち掛ける。バイズーラは、父の遺志を継いでダム建設を中止にすべきか、会社の破産を防ぐためにダム建設を進めるべきか迷うが、自分で会社を守ると言ってジュスランの申し出を断る。

●ワン・スラヤの活躍とエジムとの出会い

ワン・スラヤは、村の襲撃事件の背後には謎のマスクの男がいると電話で上司に報告する。会社に戻ってくるよう命じる上司を無視して、ケニンガウに残って事件の取材を続ける。アナックブミの製材所がマスク

2) 日本語字幕では「オマー」。欧米人の名前が名+姓であることから類推してオマール(オマー)が姓だと思ったのだろうが、マレー人には姓がなく、自分の名前の後に父親の名前を添える。ブルハム・オマールは「オマールの息子ブルハム」なので、オマールではなくブルハムと呼ぶのが適切である。

の男に襲撃されたと聞きつけて製材所を訪ねたワン・スラヤは、製材所近くの森の中でエジムと出会う。そこにアミルッディンが現れてエジムを追う。エジムを見失ったアミルッディンは川沿いにボボリアンの小屋を見つける。アミルッディンに同行した助手から、彼女は長く行方不明になっていたモンシロイだと教えられる。助手とモンシロイはカダザンドゥスン語で話す。モンシロイは、エジムは誰も殺していない、真実に耳を傾けてほしいと呼びかける。

村を襲撃した男たちを率いていたのはアナックブミの警備主任のウォンだった。ワン・スラヤは製材所がマスクの男に襲撃されたことについてウォンに尋ねるが、ウォンが襲撃されたことを否定したために訝しがる。ワン・スラヤがウォンのことを調べると、会社から給料とは別に相談料として5万リングの大金がウォンの口座に振り込まれていたことがわかる。

ワン・スラヤはブルハムの家で開かれた募金パーティーに潜入する。ウォンが木陰で男と話しており、ワン・スラヤはスマートフォンでその様子を録画する。ウォンに気づかれてワン・スラヤが森に逃げ、追いついたウォンがワン・スラヤを殺そうとしたところにエジムが助けに入る。エジムは傷ついたワン・スラヤを木の上の小屋に連れ帰って手当をする。意識を取り戻したワン・スラヤにエジムは名前を名乗る。ワン・スラヤはエジムが頭に怪我しているのを見てエジムのマスクを取ろうとするが、エジムの顔を見て驚く。エジムは小屋を去り、ワン・スラヤは1人で夜を過ごす。

●双子の兄弟の再会と共闘

翌朝、アミルッディンが木の上の小屋を見つけ、ジュスランとウォンに連絡する。アミルッディンとエジムが対面すると、それを感知したモンシロイが精神的な通信で呼びかけ、アミルッディンとエジムは双子の兄弟だと伝える。トブギが産んだ子は双子で、キナバル山のように力強い絆を結ぶようにと2人の腕にKの文字の入れ墨を入れた。しかし、レイブ犯とはいえ人を殺めてしまったモンシロイは、自分が赤ちゃんを育てるわけにいかないと思い、1人を人手に渡し、その子は町の孤児院で育てられた。もう1人はトンビルオの力を備えているために舟に乗せて森に戻した。アミルッディンとエジムはそれぞれの腕にKの文字の入れ墨があるのを見る。生き別れた双子の兄弟

だと知ったものの、妻を殺したエジムを許せずに戦おうとするアミルッディンに、ワン・スラヤがスマートフォンで撮った動画を見せる。募金パーティーの晩にウォンが話していた相手はジュスランだった。ジュスランはブルハムの会社を乗っ取るようとしており、車が崖から落ちたときにブルハムを殺し、サリナも殺そうとしたところをエジムに邪魔され、さらにバイズーラも殺そうとしていた。

ジュスランとウォンは火炎放射器を持った男たちに命じてエジムの小屋に火を放つ。エジムは小屋から川に飛び込み、溺れそうになったところをアミルッディンに助けられる。エジムのマスクが外れて川に落ち、アミルッディンがマスクを拾い、エジムの顔を見ても全く驚いた顔をせずにエジムに渡す。アミルッディンとエジムは互いに名乗りあう。

エジム、アミルッディン、ワン・スラヤはジュスランとウォンに襲われる。エジムはワン・スラヤを守ろうとして、ウォンが撃った弾を胸に受けて倒れる。森の不思議な力によって雷が落ち、ウォンは雷で倒れて燃え上がった木に足を挟まれたまま焼け死ぬ。アミルッディンはジュスランとシラットで死闘を繰り広げ、ジュスランを追い詰めて最後の一撃で殺そうとするが、瀕死のエジムの「殺すな」の声で手を緩める。エジムが拳で地割れを起こし、ジュスランは地割れに飲み込まれる。エジムは一命をとりとめ、森の力で回復する。

アミルッディンはエジムに森を出て一緒に町で暮らそうと誘うが、エジムは森を守るのが自分の使命だと言って断る。エジムに「俺たちは兄弟か」と尋ねられたアミルッディンは、「気持ちに通じあえば兄弟だ」と答える。アミルッディンはまた訪ねてくると約束してエジムと別れる。モンシロイが2人の胎盤が入った箱を地面に埋めてすっかりした顔になる。

アミルッディンは息子のアミルルにシラットを教え、森に住んでいるおじさんのことを話す。エジムは焼け残った小屋で父の写真を見つけ、木のマスクを作り直す。

エジムが住む小屋に「ラクサマナ・スナンの書」と書かれた紙が舞い込んでくる。エジムのトンビルオとしての旅が続くことを予感させて幕が閉じる。

映画『トンビルオ』のメッセージを サバ側の視点から読み解く

映画は現実世界の正確な記録を目的とするものではなく、視覚や聴覚などで観客を驚かせるものであり、映画が現実と異なることを批判するのはあまり生産的な映画の楽しみ方ではない。そのことを確認した上で、観客によって受け取るメッセージが異なることについて考えるため、映画『トンビルオ』が現実世界と乖離している点に目を向けてみたい。

以下では、筆者がサバの友人たちと『トンビルオ』について話したことを参考にしながら、サバの人びとが『トンビルオ』をどのように受け止めるのかを再構成する。「サバの人びと」と言っても、地域や宗教・民族によって多様であり、以下では主にカダザンドゥスン人を念頭に置いている。

繰り返しになるが、映画が現実と異なる点に目を向けるのは、映画から受け取るメッセージを考えるためであり、現実と異なることをもって作品としての完成度が低いと評価する意図はないことを確認しておく。

◎西海岸との関係——方言と山の景色の違和感

冒頭でエジム誕生³⁾に立ち会ったポボリアンが登場する。ポボリアンは字幕では呪医と書かれているが、カダザンドゥスン人の伝統的共同体における司祭である。西海岸での呼び方によってポボヒザンと呼ばれることが多いが、映画では内陸部の呼び方であるポボリアンと呼ばれているため、以下でもポボリアンと呼ぶ。

ポボリアンは稲作をはじめとする儀礼を司る存在であり、村の中で暮らしている。劇中でポボリアンが人里離れた森で1人でひっそりと暮らしているのには違和感があるが、これは映画の演出上のことだろう。

映画の冒頭でポボリアンの声によるナレーションが入る。カダザンドゥスン語だが、西海岸方言と内陸部方言が混じっている。『トンビルオ』は内陸部のケニンガウが舞台なので内陸部方言が話されていることは不思議でないが、西海岸方言が混じっているためにトンビルオの生い立ちに西海岸が関係しているの

かと気になってしまう。実際は、この映画でカダザンドゥスン語はサバ風味を加えるためだけに添えられているもので、制作の途中で異なる方言が混じってしまっただけであり、トンビルオの生い立ちに西海岸は関係ない。

エジムと父は木の上に作った小屋で暮らしており、小屋からはキナバル山が見える。西海岸からも内陸部からも臨むことができるキナバル山は、Ki Nabalu（神さま）の名前が示すように、カダザンドゥスン人にとって神の山である。『トンビルオ』の舞台であるケニンガウは内陸部のさらに奥にあるため、距離と地形の関係でキナバル山はおそらく見えないが、サバの物語にキナバル山を出したいという気持ちは十分に理解できる。

ただし、キナバル山は見る場所によって異なる姿を見せるため、サバの人びとがキナバル山を見ると、どこから見た姿なのかが気になってしまう。エジムたちが暮らす小屋から見えるキナバル山は西海岸から臨んだ姿であり、そのためサバの観客はエジムの小屋が西海岸にあるのかと思ってしまう。物語が進むうちにエジムが暮らす小屋はケニンガウにあるらしいとわかり、キナバル山が西海岸から見た姿なのは演出上の理由からだろうと理解する。もっとも、エジムの小屋が本当にケニンガウにあるのか戸惑うこと背景には、映画に登場する森林が茂みに毛が生えた程度でしかなく、沖縄本島よりも広い範囲のクロカー山脈公園の密林の奥深さや豊かさがまったく感じられないという違和感もある。おそらくスタッフや機材をサバの内陸部に運んで撮影するのはコストなどの面で現実的でなかったため、実際の撮影は半島部のスランゴール州の森林で行われた。

また、木の上の小屋はスタイリッシュだが、サバの人びとには素直に受け止めにくい演出である。半島部にはサバを未開の地と考える人がまだ多く、冗談半分に（しかしかなり本気で）サバの人は木の上に暮らしているのかと尋ねることがある。サバの人びとにとって「木の上で暮らす」とは、半島部の人からサバが未開だと言って馬鹿にされるときの定番の言い方である。

◎登場人物はサバ人なのか——言葉の違和感

カダザンドゥスン語は演出上の味付けに過ぎないので言葉が多少おかしくても物語の理解には問題な

3) トンビルオは内陸部のカダザンドゥスン人を中心にサバの人びとの間で信じられている精霊の1つの名前で、一般名詞である。映画では森林の守護神に与えられる称号のように扱われている。劇中でトンビルオになる人物の名前がエジムである。

い。舞台がケニンガウの森林らしく見えないことや、キナバル山の姿が内陸部からの姿になっていないことも、撮影上の都合でやむを得ないこともあるだろう。多少の違和感はあるとしても、物語を理解する上で致命的な問題であるとは言えない。これに対し、物語を理解する上でサバの人びとが大きな戸惑いを覚えるのは、登場人物がサバ人なのか半島部から来た人なのか分からないことである。

その最も大きな理由は、登場人物が話す言葉である。サバでは民族・宗教を問わずほとんどの人が日常的にマレー語を話す。半島部のマレー語と言葉は同じだが、半島部とサバとではマレー語のアクセントや単語の選択が異なる。乱暴な例え方をすれば、日本の首都圏方言と関西方言の違いだと思えばよい。標準のマレー語は半島部のマレー語がもとになっているため、半島部の都市のマレー人は自分では標準マレー語を話しているつもりでも、サバの人びとから見ると、それは標準マレー語ではなく半島部の都市のマレー語方言である。『トンビルオ』では、助手役の1人か2人がサバのアクセント全開のマレー語を話してとても親しみを覚えるのを除けば、他の主要な登場人物はすべて半島部の役者であり、半島部のマレー語を話している。

スタッフやキャストは、サバと半島部でマレー語のアクセントが違うことは知っていても、そこまでリアリティを追求する必要はないと考えたのだろう。半島部の役者にすれば、標準マレー語で話しているのだから問題なく、あえてサバ風のマレー語を話す必要はないと考えたとしても不思議ではない。役者たちは自分がふだん話しているようにマレー語を話したようだ。その結果、サリナとワン・スラヤは半島部の都市のマレー語にしか聞こえないマレー語を話すことになった。半島部の観客にそのことに違和感を覚える人はほとんどいなかっただろう。しかし、サバの人びとから見れば、ブルハム一族もワン・スラヤも半島部の人に見える。

サリナはどう聞いても半島部のマレー語を話しているとしか思えない。サリナはブルハムの娘なので、ブルハム一族も半島部出身でサバに来て会社を作ったのかと思ってしまう。ワン・スラヤはテレビ局の記者で、「町」のテレビ局からケニンガウに派遣されているという設定なので、半島部のテレビ局からサバに派遣されたと考えればぴったり当てはまる。

他の登場人物を見てもこの混乱は解消されない。アミルッディンはサバのマレー語と半島部のマレー語を混ぜて話す。おそらく、役者はサバのマレー語を話そうと努力したけれど、うまくいかずに中途半端になってしまったのだろう。そのため物語の序盤でアミルッディンは半島部出身でサバに来た人なのかもしれないと思わせるが、終盤でアミルッディンはエジムと生き別れた双子であり、内陸部出身だが町の孤児院で育ったと知らされると、孤児院で半島部風のマレー語を身につけたのかもしれないなどと思って自分を納得させることになる。

●地名が曖昧にされることで浮かび上がる違い

登場人物が半島部のマレー語を話しているのは演出上の都合であり、どんなマレー語を話していてもみんなサバの人だという設定なのかもしれない。ただしそのように確信できないのは、サバのマレー語をのびのびと話している登場人物が2人いるためにどうしても違いが意識されてしまうことに加えて、演出上の理由から地名を曖昧にしていることがあるように思われる。

商業的に成功させることを考えればこの映画の主要なターゲットは半島部のマレー人であり、観客がサバの地名に馴染みがあるとは期待できない。サバの地名をたくさん入れることで物語の筋を追いくくするのを避けたためか、劇中で言及される地名は物語の舞台であるケニンガウとその外にある「町」しか出てこない。ワン・スラヤが会社に戻るように上司に言われたときも、「町に戻る」と言うだけで、半島部の首都クアラランプールに戻るのか、サバの西海岸にある州都クタキナバルに戻るのかはあいまいにされている。

もっとも、半島部の人びとから見れば、サバの人びとがマレーシアの中で自分たちの立ち位置を気にしているということが実感できず、そのことが反映されているだけなのかもしれない。同じマレーシアの一員なのに、マレーシアと言えればいつも半島部のことだけを指し、自分たちは見えない存在だと思われ続けてきたサバの人びとにとって、半島部の人びとを見ると常に自分たちのとの違いが意識されてしまう。これに対して半島部の人たちは、行ったことはないしふだん意識することはないけれど、自分たちが暮らしている生活の延長上にある場所の1つであって、その意味では半島部の他の地域と変わるところはないと思って

いるのだろう。

●ジャウイで書かれ、理解できないメッセージ

エジムを育てたポンドロウは、ゆっくりと間のあいたマレー語を話す。役者はサバのマレー語を話そうと思ったけれど、コーチしてくれる人がいなかったため、言葉をゆっくり話せばサバのマレー語に聞こえると期待したのだろうか。残念ながら、よくわかっていない半島部の人がサバのマレー語を無理やりまねしようとして滑稽なマレー語を話しているようにしか見えない。元軍人という設定なので、半島部からサバに来た国軍兵士で、何らかの事情で軍から外れてサバに留まり、1人で暮らしているのだと考えるとぴったりはまるが、名前がカダザンドゥスン人風なのでうまくあてはまらない。

名前から考えて、ポンドロウは非イスラム教徒のカダザンドゥスン人なのだろう。したがってポンドロウに育てられたエジムもイスラム教徒ではない。上述の通り小説シリーズでは後にエジムがイスラム教に改宗しており、このことから映画の時点でエジムはイスラム教徒でないとと言える。そうだとすると、物語の最後にエジムのもとに舞い込んできた紙に何が書かれていたか、エジムにはわからなかったことになる。

カダザンドゥスン語はもともと文字がなく、19世紀以降にキリスト教の宣教師がローマ字化を試みたものの、標準化はなかなか進まなかった。その理由は、カダザンドゥスン語を子どもに教えるも進学や就職に役立たないと考える親が多かったことと、沿岸部や内陸部のどの方言をもとに標準化するか決められなかったことによる。そのため、カダザンドゥスン人の多くは、家庭や地域社会ではカダザンドゥスン語を使うけれど学校ではマレー語や英語で勉強するという言語環境で育った。

マレー語は、かつてはジャウイと呼ばれるアラビア文字で書かれていたが、20世紀半ば頃からローマ字に切り替えられていき、現在では特別な場合を除いてマレー語はすべてローマ字で書かれる。イスラム教徒の子どもは学校の授業と別にコーランを勉強するのでアラビア語の読み書きができるが、非イスラム教徒はマレー語の読み書きができてジャウイの読み書きはできない。

映画の最後にエジムのもとに1枚の紙が舞い込ん

でくる。そこにはジャウイで「ラクサマナ・スナンの書」と書かれている。スナンの活躍譚の1ページのようだ。スナンは半島部出身でスマトラ島のアチェで活躍した英雄で、ラムリーはスナンを主人公にした小説も書いている⁴⁾。おそらくエジムの次の活躍の物語はスナンと関係するのだろうと次回作を匂わせて幕を閉じる。トンビルオの物語はサバの異国情緒があって楽しめたが、毎回異国情緒だけだと観客が飽きてしまうので、それを避けるためにマレー世界とのつながりを見せる意味もあってジャウイにしたのだろう。もっとも、エジムはイスラム教徒ではないので、おそらくジャウイは読めないはずだ。私のサバの友人たちは、エジムは紙に何が書かれているかわからないので丸めて捨てたのだろうと笑いながら話していた。

「サバ人」というまとまりを 意識させ強化した映画『トンビルオ』

設定上はどの登場人物もサバの人である（あるいは、そもそもサバの人とそれ以外の人に分けて考えていない）としても、サバの人びとから見ると、言葉などの面からブルハム一族やワン・スラヤは半島部の人であるように思えてしまう。このことが『トンビルオ』の物語にどのような解釈を与えるかを考えてみたい。

●名前だけで実が伴わない「土地の子」政策

ブルハムが社長をつとめる木材会社はアナックブミ (Anak Bumi) という名前である。アナックブミはマレー語で「土地の子」を意味する。サンスクリット語起源で「土地の子」を意味するブミプトラと同じ意味である。

ブルハムとサリナが乗った車が記者会見場に近づくくと、駆け寄った住民たちに取り囲まれる⁵⁾。住民た

4) マレーシアで国民的に知られたマレー人の英雄にハン・トゥアがいる。ハン・トゥアはスルタンに忠誠を誓うあまりに公正な判断ができない存在であるとして批判されることもあり、ハン・トゥアにかわるマレー人の英雄としてスナンを挙げる人もいる。ハン・トゥアについては別の機会に論じたい。

5) 住民たちは地元の人たちという設定で、老若男女がそれなりに揃っている。ほとんど普段着を着ている中で、1人だけカダザンドゥスン人の正装をまとっている男性がいる。サバ風味を足すために入れたのだろうが、年に一度の収穫祭ぐらいしか着る機会がない民族衣装を着た男性がダム建設の反対デモに参加している違和感のため、誰かの結婚式に参列した帰りにたまたま反対運動に立ち寄った人なのかと思ってしまう。

ちはダム建設とそのための森林伐採に反対するプラカードを掲げている。そこには「ケニンガウの森を守れ」にまじって「アナックブミは名前だけだ」の文字が見える。

土地の子すなわちブミプトラとは、サバにもとからあった表現ではなく、半島部の中央政府が1970年代に導入した表現である。マレーシアの国民の中でも「土地の子」すなわち原住民と先住民を優先する政策が実施され、一般にブミプトラ政策と呼ばれている。マレーシア全体で考えるならば、ブミプトラ政策は半島部のマレー人とオラン・アスリ、そしてカダザンドゥスン人をはじめとするサバとサラワクの先住諸族をすべて対象にするべきである。しかし、中央政府はブミプトラ政策のもとでもっぱら半島部のマレー人の地位向上に力を注ぎ、オラン・アスリやサバとサラワクの先住諸族についてはほぼ全面的に放置してきたと言ってよい。中央政府が進めてきたのはブミプトラ政策ではなくマレー人優先政策でしかなかったと言える。「アナックブミは名前だけだ」というのは、マレーシアの「土地の子」のためであるはずのブミプトラ政策はその名前に値しないという批判と重なって読める。

アナックブミが半島部からサバに進出してきた会社のように思えることから、半島部の中央政府が「土地の子のため」と言ってサバでもブミプトラ政策を実施すると言っておきながら実際には「土地の子」の生活はいっこうに良くなり、中央政府と半島部の会社はサバでもうけておきながらもサバの人びとには利益を分けようとしないうという思いと重なってくる。

●サバを愛する者は誰もがみな兄弟

改めて半島部の人びとにこの物語がどのように見えるかを確認するならば、マレーシアの一地方であるサバのケニンガウで、地元の会社の社長が住民のためを考えてダム建設に反対し、会社の経営を重視した社長の弟が社長と娘を殺して会社を乗っ取るうとして、会社の警備主任を使って村人の家を焼き、邪魔者であるテレビ記者と謎のマスクの男を殺そうとしたけれど、謎のマスクの男は自然を司る不思議な力を持った密林の守護者トンビルオで、仲間たちの助けを借りて会社側の悪人たちを成敗したという物語になる。舞台はサバのケニンガウで、登場人物はすべて地元の人たちで

あり、地元の有力一族が経営方針をめぐって2つに分かれて対立した騒動であって、そこではサバから半島部に向けられた視線はまったく意識されない。

これに対して、サバの人びとの目にはそれとは異なる物語が見える。アミルッディンとエジムは双子だが、生まれてすぐに引き離されて別々の人生を生きることになった。アミルッディンは町の孤児院に引き取られ、イスラム教徒として育ち、自然保護員になって森林を守っている。エジムは森で暮らすポンドロウのもとで非イスラム教徒として育てられ、トンビルオとして森を守っている。どちらも森林を（したがってサバを）守ろうとする思いは一緒であり、どちらも森林を守る役目を負ってきた。そこに半島部から来て「土地の子のため」を掲げる会社がサバの森林を破壊してサバの富を奪おうとしたため、エジムとアミルッディンが手を結んで会社に立ち向かった。

エジムとアミルッディンはキナバル山が象徴するサバの子であり、サバを象徴している。アミルッディンが育った「町」がどこなのかは明確に語られないが、イスラム教徒として育ったことなどから考えると沿岸部を指すと考えられる。つまり、サバは「海の民」と「陸の民」に分かれ、互いに争うこともあったものの、「土地の子」のためを掲げる半島部の勢力がサバの自然と富を奪いに来たことをきっかけに、「海の民」と「陸の民」が絆を結び直して半島部の勢力を撃退したという物語となる。エジムが「俺たちは兄弟か」と尋ね、アミルッディンが「気持ちを通じあえば兄弟だ」と答えるのは、物語上は生き別れになった双子が兄弟の絆を確認する場面だが、サバの人どうしは、「海の民」も「陸の民」も、直接の血縁がなくてもサバを愛するという気持ちを通じあえば民族や宗教の違いにかかわらず兄弟なのだというメッセージとして受け止められる。

* * *

映画『トンビルオ』は2017年10月にマレーシアの全国の映画館で上映された。サバの映画館でも上映され、多くの人びとが劇場に足を運び、この映画について語り合った。2018年5月の総選挙でサバの人びとが中央政府を倒し、「ドリアンの実が落ちた」ことを喜んだのはその半年後のことであった。

参考文献

(1) 小説

- Ramlee Awang Murshid. 1998. *Tombiruo: Penunggu Rimba*. Alaf 21.
- . 2001. *Semangat Hutan*. Alaf 21.
- . 2004. *Tombiruo Terakhir*. Alaf 21.
- . 2017. *Legasi Tomboiruo*. Karangraf.

(2) 新聞記事

- Gomes, Elton. 2018. “Blue Water Tank Fell onto a Parked Car in Sinsuran”. *Borneo Post*. June 13, 2018.
- Joibi, Natasha. 2018. “Car Crushed by Water Tank Falling off Edge of Building”. *Star*. June 13, 2018.
- Mu, Paul. 2018. “KK Musang King Bears Fruit”. *New Sabah Times*. May 16, 2018.
- Najurus, Vivi Oliviana. 2018. “Kereta Rosak Dihempap Tangki Air”. *Utusan Borneo*. June 13, 2018.
- Vanessa Jsol, Vesta. 2018. “Election: ‘Durian Runtuh’ for Small Businesses”. *New Sabah Times*. May 8, 2018.